【エッセイ】
かっぺい

前川　美和

下の娘の知子が小学一年生のとき、学校の帰りに拾ってきた鯖トラのオス猫がかっぺいである。トラ猫は野生を残すと言われる通り、よく動きよく悪さをした。

最初はオシッコ。オスなのでしばらくするとあちこちにオシッコをひっかけた。ピアノの上にされたときは鍵盤にまで染み込んでしまったので、調律の人に頼んできれいにしてもらったけれど、いつまでもくさくて困った。また、朝出掛けに玄関に置いておいた息子の弁当の上でやらかしたこともあった。何事にも頓着しない息子は包んでいた布をはがして中身の弁当だけ持って行ったそうだ。わざわざ安定の悪い弁当の上でやってる姿を想像すると笑えるが、理解に苦しむ。次は噛み遊び。ただ噛むのではなく噛み取って食べてたようだ。娘のウールのセーターやスクール水着の胸のあたりがまん丸くくり抜かれていた。はじめはどうしてこんなにきれいに丸くなっているのか不思議だったが、ある日かっぺいが必死になってソックスを噛んでいるのを目撃した。あとにはカカトに丸く穴の開いたヨダレまみれのそっくすが残されていた。それからはエロかっぺいと呼ばれることもあった。

これらの行動は、人の関心を引きたいというか、人の愛情を求める心が出ているようで、かっぺいはとても人なつこい猫だった。というのは、我が家を訪れるゲスト、男女、国籍問わず誰のひざにも乗りに行くし、園部カレー事件のとき、現場付近の家に聞き込みに来たお巡りさんのズボンに爪を立てて脚を上る始末だった。

猫との関係はというと、弱いくせに喧嘩が絶えなかった。なにせ大きな声で鳴いていると思ったら、かっぺいが近所の猫とにらみ合っている。心配して近づくと味方を得て調子に乗って余計大きな声を出す。夕方家に帰ってこなかった日の深夜、猫同士の鳴き声に飛び起き、連れ戻しに行ったことも数知れず。耳が破られることもしょっちゅうだったし、おでこに相手の爪が突き刺さったまま帰ってきたこともあった。

そんなかっぺいも晩年は体の故障が続いた。ガリガリにやせて、グレムリンの悪者みたいな猫相になったり、毛が抜けてハゲハゲになってしまったり、怪我から膿がたまってパンパンに腫れたりして動物病院にもよく通った。

そして最期。一番好きな上の娘、直子の布団で一緒に眠っていたが急に立ち上がり、玄関に座り、出してくれとばかりに泣いたそうだ。
娘がドアを開けてやると、振り返りながらヨタヨタとどこかへ歩いて行ったという。
それっきり帰ってこなかった。

かっぺいがいなくなってもう１０年近くになる。
かっぺいは近所でも、怖がれながらも可愛がられた猫だった。裏で子どもたちがかっぺい、

かっぺいと呼んでることも多く、隣のおじさんは田舎へ帰ると「かっぺいにおみやげ」と言ってマタタビをくれた。
いろんなお家の庭はもちろん、部屋にまで侵入していた形跡があるが、知らぬが花ということにしておこう。

〈了〉